

胃がんの診療

●胃がんとは

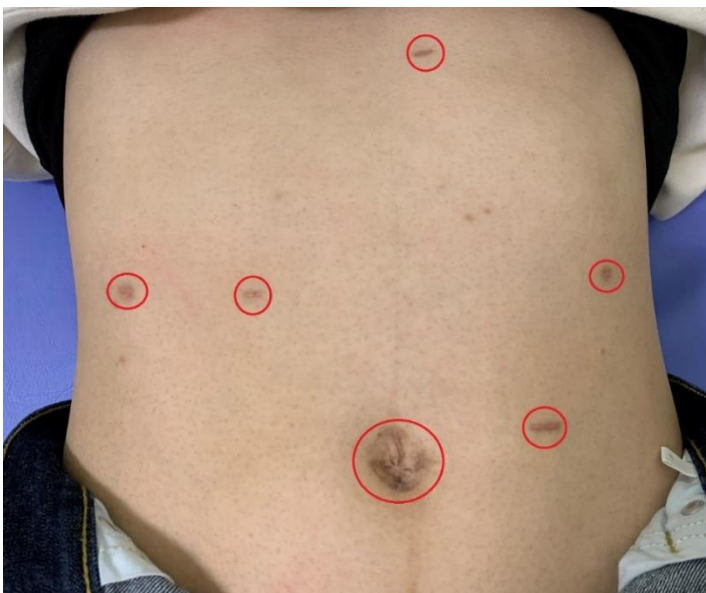
胃がんは胃壁の内側にある粘膜に発生します。内側の粘膜から徐々に粘膜下層、固有筋層、漿膜（しょうまく）へと外側に向かって広がっていきます。がん細胞が粘膜または粘膜下層までにとどまっているものを「早期胃がん」といい、筋層より深く達したものを「進行胃がん」といいます。あくまでがんの深さを基準にした呼び方であるため、「進行胃がん」であるからといって「手遅れ」や「末期」であるわけではありません。胃がんに伴う症状としては胃の痛みや不快感などのほか食欲不振や胸やけ、吐き気、食べ物のつかえなどが知られています。早期の胃がんでは症状を起こさないことが多いです。

●胃がんの原因

胃がんの主なリスク要因としては多量の塩分や喫煙、飲酒などのほか、ピロリ菌（ヘリコバクター・ピロリ）の感染が指摘されています。ピロリ菌は60歳以上の日本人の約半数が感染していると言われていますが、感染した人の全てが胃がんになるわけではありません。

●胃がんの検査

胃がんに対する検査としては胃 X 線検査（バリウム）や胃内視鏡検査を行います。「胃カメラは苦しくて」と敬遠される方もいると思いますが、最近では径の細い経鼻内視鏡を使用して苦痛の少ない検査を行う方も増えています。



腹腔鏡下胃全摘術後 1 カ月の創部。臍から胃を取り出しますがきれいに縫えば目立ちません。これだけの傷で胃全摘が行えます。

●胃がんの治療

胃がんの進行度に応じて治療法を選択します。一部の早期胃がんに対しては内視鏡切除が適応となります。早期胃がんの中でも内視鏡切除ができない場合や進行胃がんに対しては手術による胃切除が必要となります。胃を切除する範囲については、胃がんのできた場所により幽門側胃切除術(胃の下半分～2/3を切除)、噴門側胃切除術(胃の上半分を切除)、胃全摘術などがあります。手術方法も従来からの開腹手術のほか、腹腔鏡を用いて小さい創(きず)で行う腹腔鏡手術が増えてきています。また2019年からは手術ロボットを用いた「ロボット支援下手術」も胃がんの手術に対して保険適応となりました。一方で、胃がんが進行し肝転移や腹膜播種(がん細胞が胃壁の外にこぼれ落ち、腹膜に付着して発育した状態)のある場合には抗がん剤治療を行います。

当院では胃がんの診断から治療まで、患者さまと相談をしながら進めていきます。手術に関しては積極的に腹腔鏡手術を取り入れ、小さい創(きず)で早い回復を目指しています(前ページ写真)。胃の症状があったり、がんを心配されたりする場合には、まずかかりつけの先生にご相談いただき、当院外来を受診していただければと思います。

【外科診療部長 緒方 杏一】

